

松永老と青年

ここ二、三年来、何の道縁に導かれてか、私は松永安左衛門老とお親しく願うことになった。そして老とお目にかかることが私の一つの楽しみとなってきた。

何となく私の心をひくのは、もとより老の豊富な趣味や該博な見聞や、それを一つのまとまりにまとめ上げる老の人間味であるにちがいないのであるが、それよりも老の青年のような壮者をしのぐ若さに魅力を感じるのである。

世に「若朽」といふいやな言葉がある。それは全く無為にして青春をむしばむ毒素であるが、私などもこの毒素にむしばまれていた徒輩に仲間入りしてはいないかと反省させられる場合が多いのである。

老の場合においては「老いて益々旺んなり」と言つて少しの誇張も感ぜられない人である。電力問題について国会や政府の首脳部をはじめとして全国各地の経営者を叱咤しつつ、飽くところを知らないことは衆知のことである。この間も八十二の老齢で、われわれの心配をものもしな

いで欧米を旅行し先進諸国をつぶさに見聞し、旧友との交誼を温められつつ外資の導入その他に骨を折って歸られた。

老の関心は独り電力問題だけではない。日本の経済の自立という観点から、石炭や鉄鋼などの基幹産業の立て直しから金融界の再建や労働体制の整備にまで及び、しかもそれが空疎な大言壮語ではなく、具体的な数字に基礎をもった具体的献策であり、しかもその献策の実現を阻むものはこれをどうしてほぐしていくかの政治の分野にまで行き届いた接近がなされている始末である。そしてそういう活動の全過程を通して一切のあく、というか欲というか、そういうものを微塵も持ち合せていないところに、われわれは傾倒するのである。

われわれ若朽の徒は、よろしく老の高邁にして至純なガイストの洗礼をうけなくては、本物になれないように思えるし、かかる老がなお健在であられることを日本のために祝福したい。

(昭、三〇・九)